

紙 碑



谷岡武雄先生のご逝去を悼む

吉 越 昭 久*

2014年6月14日午前11時35分、谷岡武雄先生がご逝去された。享年98歳であった。先生は、地理学者として国際的にも知られる偉大な業績を残されただけでなく、学校法人立命館総長・立命館大学学長としても現在の立命館大学の飛躍の礎を築かれた名実共に功労者であっただけに、先生のご逝去は悔やまれてならない。教え子の一人である筆者には、心よりご冥福をお祈りし、安らかに休息されるよう願うことしかできないのが残念である。先生にもうお会いできないかと思うと、ご逝去から1年以上経った今でも心にあいた大きな穴を塞ぐことができないでいる。先生からご指導いただいた多くのことがらを引き継ぎさらに発展させることで、その恩に少しでも報いることができればと考えている。

谷岡先生は、1916年3月に京都府綴喜郡多賀村で誕生された。京都府師範学校本科を卒業し専攻科を修了された後、小学校の訓導を勤められた。この間、立命館大学予科を修了され、1944年には立命館大学法文学部を卒業された。

谷岡先生は、1947年に立命館専門学校専任講師兼立命館大学講師となられたが、その後助教授を経て、1955年に39歳の若さで教授に昇任されている。1962年には、「近畿における平野の

* 立命館大学文学部特別任用教授

発達に関する地理学的研究」で東京大学より理学博士の学位を授与された。先生は、地理学者として日本のみならず国際的にもめざましい活躍をされた。人文地理学会の会長に選出されるなど国内の諸学会の要職を歴任されただけでなく、国際地理学連合（IGU）の部会の座長や委員長など多くの国際的な要職も経験された。立命館大学在職中には、文学部長、学校法人立命館理事、評議員などを務められた。このような学内行政だけでなく、東京大学・京都大学をはじめ、多くの国公立大学の学部・大学院の教壇にも立たれ、日本の地理学の教育にも多大な貢献をしてこられた。そして、1981年3月に定年により立命館大学を退職された。

谷岡先生は1981年から1984年まで特別任用教授をされた後、中部大学教授に就任されたが、学校法人立命館総長・立命館大学学長に選出されたため任期の途中で退職されることとなった。こうして1985年1月より、学校法人立命館全体の教学および立命館大学の研究・教育の責任者として、誰もが認める多大な貢献をされてこられた。先生は総長・学長の6年間に、様々な改革に着手され獅子奮迅の働きをされたことで立命館大学の「中興の祖」との評価を得ておられる。また先生は、立命館大学の新しい事業を展開し改革を推進されただけでなく、日本私立大学連盟理事・大学基準協会理事・京都国連協会常務理事・京都日仏協会副会長など多くの役職にも就かれ、重要な役割を果たしてこられた。そして、1990年末に総長・学長を惜しまれながらも退かれた。

総長・学長を退任された以降も、学校法人立命館の名誉役員、立命館大学名誉教授として法人全体や大学に、日本地理学会名誉会員として地理学界に多くの指導をしてこられた。また、文学部地理学教室にも厳しい中にも暖かな眼差しをむけてこられたことは私共のよく知るところである。

長年にわたる谷岡先生の活躍に対して、1991年に勲二等旭日重光賞が贈られた。他にも、1975年にベルギーのリエージュ大学章、1981年にはフランスのパルム・アカデミック勲章のオフィシェ章、2003年にはパルム・アカデミック勲章の最上位のコマンドウール章を受賞された。また他にも、日本地理学会名誉会員、日本地理教育学会顧問、パリ地理学会名誉会員、イリノイ大学名誉文学博士、近畿都市学会顧問など、学会や大学などからも数々の称号を受けておられる。

谷岡先生の業績を述べる場合、地理学の研究や立命館大学における行政などの側面は欠かすことができないであろう。しかし、既にいくつかの学会誌で先生の紙碑が公刊されている。例えば、立命館大学において谷岡総長・学長を支えてこられた戸所隆氏による『地理学評論』Ser.A、第88巻第3号や、地理学における専門が近い片平博文氏による『人文地理』第66巻第5号などがそれである。従って、学内行政や研究上の詳細はこれらの紙碑に譲りたい。本稿とあわせてお読みいただければ幸いである。本稿では、まず著者の視点から先生の業績を記してみたい。

谷岡先生の研究の出発点は、1944年の「宇治茶業労働圏の地理学的研究」と題する卒業論文（1950年に地理学評論第23巻第3・4・5号合併号に掲載）にあった。その後の研究は、歴史地理学を基本にして、そこから都市・村落地理学、応用地理学や地誌学、地理教育などへと裾野を大きく広げていかれたことが特徴であると考えられる。

歴史地理学では、条里制や古代の村落研究を大きく発展させたことが知られている。その成果として単行本に限れば、『平野の地理—平野の発達と開発に関する比較歴史地理学的方法論—』

(1963年、古今書院)、『平野の開発—近畿を中心として—』(1964年、古今書院)、『聖徳太子の榜示石—鶴荘の歴史地理—』(1976年、学生社)、『歴史地理学』(1979年、古今書院)、『歴史地理学プロシーディングス』(浮田典良氏との共編著、古今書院、1982年)などがある。都市・村落地理学では農村から巨大都市までが研究対象にされたが、それらの成果としては『京都—その地理的探訪—』(1961年、古今書院)、『フランスの農村』(1966年、古今書院)、『都市地理学』(木内信蔵氏との共訳、1971年、鹿島出版会)、『ホモ・ハビタートル—巨大都市の終り—』(1972年、三省堂新書)、『巨大都市の終焉』(1981年、三省堂)、『フランスの都市を歩く』(1983年、大阪書籍)、『地中海の都市を歩く』(1983年、大阪書籍)などがある。先生は早くから応用地理学の必要性を指摘されたが、その成果としては『応用地理学とその課題』(清水馨八郎・西村嘉助氏との共編、1966年、大明堂)がある。地誌学についても、『ニッポン再見』(籠瀬良明氏との共著、1970年、雄渾社)、『私のヨーロッパ』(1981年、古今書院)、『東欧新事情』(ストラシエヴィッチ氏との共著、1982年、三省堂)、『ラ・フランス』(1989年、古今書院)、『フランス 土地の心(南仏編)』(1995年、古今書院)、『フランス 土地の心(北仏編)』(1997年、古今書院)、『ヨーロッパ都市の歴史街道』(2000年、古今書院)、『野道の歴史を歩く1 京都・山城』(2002年、古今書院)、『野道の歴史を歩く2 奈良・大和』(2003年、古今書院)、『野道の歴史を歩く3 滋賀・近江』(2005年、古今書院)、『世界・日本文化風土論』(2006年、古今書院)、『関西 ル=クワンサイ その生活と環境』(2010年、古今書院)など多くの業績がある。この地誌学に関する業績と共に特徴的なのは、多くの地名辞典の編纂や監修をされたことで、三省堂などから優れた辞典が刊行されている。筆者も1977~79年にかけて、平凡社の『国民百科事典』で多くの地名を先生との共著で執筆させていただいたことがある。さらに、地理教育での顕著な業績は、長年にわたって帝国書院の高等学校「地理」の教科書を執筆されたことであろう。立命館大学の地理学教室の存在を、全国の高校生に広める効果をもたらしたことは疑いがない。その他にも、人間という視点から地理学を捉えた『人文地理学序説—一人間理解の一つの試み—』(1955年、雄渾社)、『人間をとらえる—一人間の地理学—』(1970年、雄渾社)、『地理学への道』(1973年、地人書房)などがあって、時空間を通して人間を捉える独自の世界を構かれたと考えている。先生のお名前が広く一般に知られることになったのは、前述の教科書と共に「週刊朝日百科 世界の食べもの」の編集委員をされたことの二つが大きかったと思われる。後者の141冊に及ぶシリーズは、1980~83年にかけて朝日新聞社から刊行された。全巻の監修は、石毛直道・辻 静雄・中尾佐助氏で、編集委員としては先生の他に加藤秀俊・竹内啓一・團伊玖磨氏などがおられた。

このように、谷岡先生の研究は多岐な分野にわたり、質の高い多くの業績を残してこられた。そして、最後の単行本が恐らく『関西 ル=クワンサイ その生活と環境』であると思われるので、66年間にもわたって研究成果を刊行し続けてこられたことに驚きを禁じ得ない。先生の研究が宇治茶の論文から出発し、途中で世界各地の研究を挟みながら、最後に『関西 ル=クワンサイ その生活と環境』で締めくくられたことに、先生の関西や宇治への強い想いを感じないではいられない。

このように谷岡先生の業績を振り返ってみると、いくつかの特徴があるように思われる。一つ

目は、研究対象の時空間的な広さである。研究対象の期間は古代から現在・未来に、空間的には日本にとどまらず世界各地域に及んでいる。二つ目は、学際化の実践である。先生は地理学分野だけでなく、歴史学など他分野の研究者との緊密な交流を通し、早くから学際化の実践をされてこられたのである。三つ目は、先生が目指された究極の研究対象についてである。筆者はかねてから、それは空間に居住し、そこで行動する「人間」にあったのではないかと考えていた。最近になっても、この考えに大きな間違いはなかったと確信している。

次に、多少主観的になるが、谷岡先生のエピソードをトピック的に記してみたい。

座右の銘：1991年になって、総長・学長を退任された記念の会が開かれた。その際に、谷岡先生から色紙をいただいたが、そこには「今を充たし永遠の今を生きる」という言葉が記されていた。先生の考えを凝縮した言葉として、記憶し続けたいと考えている。

お洒落：谷岡先生は、おしゃれで身だしなみには大変気を使っておられた。先生がネクタイをされておられない姿は、ご自宅でしか拝見したことがないほどで、常にきちんとしておられた。筆者も、せめて服装くらいは見習いたいと心がけてきたが、とても果たせなかった。

文章と文字：谷岡先生が書かれた文章は、実到的確である上に美しく、時に軽妙で良い意味で色気を感じるものであった。先生は、風景を思い浮かべさせ、人の心まで浮き彫りにするような筆力の持ち主であった。筆者は院生から助手の頃に、先生から度々文章を訂正していただいた。原稿はもとの文章がなくなるくらいに訂正されて戻されたが、先生の書かれた文字を読むのに大変苦労したことを思い出す。先生の文字はよくいえば実に味わい深いのであるが、判読には高い技術を要した。

写真：谷岡先生は、単行本の中に多くの素晴らしい写真を効果的に配された。先生は、風景だけのものより人物（特に子供と女性）を入れた写真を撮影されることを好まれた。写真の構図に、地理学者の眼と芸術的なセンスを感じた。総長・学長を退かれてしばらくの期間だったが、先生のお話しをお聞きしスライドを見せていただく会が定期的に行われたことがある。素晴らしいスライドと共にウィットの効いた先生の話に魅せられたことを思い出す。

三号雑誌：立命館大学地理学同友会をもとにして、立命館地理学会を設立したのが1988年であった。立命館地理学会では、学会誌として「立命館地理学」を刊行することを決めたが、その時に谷岡先生から「三号雑誌にはするな」と厳しくいわれたことがある。先生のいわれたことは、雑誌を刊行するからには将来にわたって継続するようなものにせよという意味であった。その「立命館地理学」は、今年で第27号になった。三号雑誌にならずにほっとしている。